誌上行学講習会

高佐日煌上人

「無顧の悪人も猶を妻子を慈愛す。菩薩界の一分なり。」

無顧（むこ）とは全く反省しない状態、悪いことを平気で何でもやってしまう。そういう悪人でも自分の妻であるとか、子供に対してだけは愛情を持っている。人を愛そうという気持は菩薩につながっていまいますから「菩薩界の一分なりと言えるのであります。いわんや一般の善人には大いに菩薩界があるといえるのであります。

「但だ仏界計りは現じ難し。」

本当に生きた仏さまだけにはなかなかおめにかかれません。しかし

「九界を具するを以て強いて之を信じ、疑惑することを忽れ。（中略）」

生きた仏さまは例をあげて説明するのは非常に困難であるが、九界までであるのであるから最後の仏心が無いとは考えられない。だからこれを信じなければならないであらう。強いてその例を上げるならば、

「十界互具之を立つるのは石中の火、木中の花信じ難けれども縁に値うて出生すれば之を信ず。」

火打ち石を合はせれば火が出る。これは石の中に火のあること、花が咲くけれども一体木の中のどこに花の種があるか、木を粉々にしてもわからない。しかし立派に美くしい花が咲き香る。

「年々に咲くや吉野の桜花、木を切りてみよ花のありかわ」という歌もあります。これと同様で、我々の中に仏界（心）のあることは信じ難いけれども縁において出て来るものであるから、信じなければならないというのであります。

「人界所具の仏界は、水中の火、火中の水、最も甚だ信じ難し。然りと雖も竜火はより出で、竜水は火より生ず。」

竜火竜水というのは台風と雷みたいなもので、稲びかりがすると昔は、竜が雷の中に居て光りを出すと信じられていた。強雨はこの火の中かごら出て来ると思っているとすごい光りを発する。どすごい雨が降っているとたしかにゴーッとすっちが先か解らなかったのでありましょう。

「心得られざれども現証あれば之を用ゆ。既に人界の八界（九界の誤り）之を信ず、仏界何ぞ之を用いざらん。堯舜等の聖人の如きは万民に於て偏頗（へんぱ）なし。人界の他界の一分なり。太子は人界より他界を見る。不軽菩薩は所見の人に於て他身を見る。此れ等の現証を悉多り。人界を成ず。以て信ず可きなり。」

次号に続く